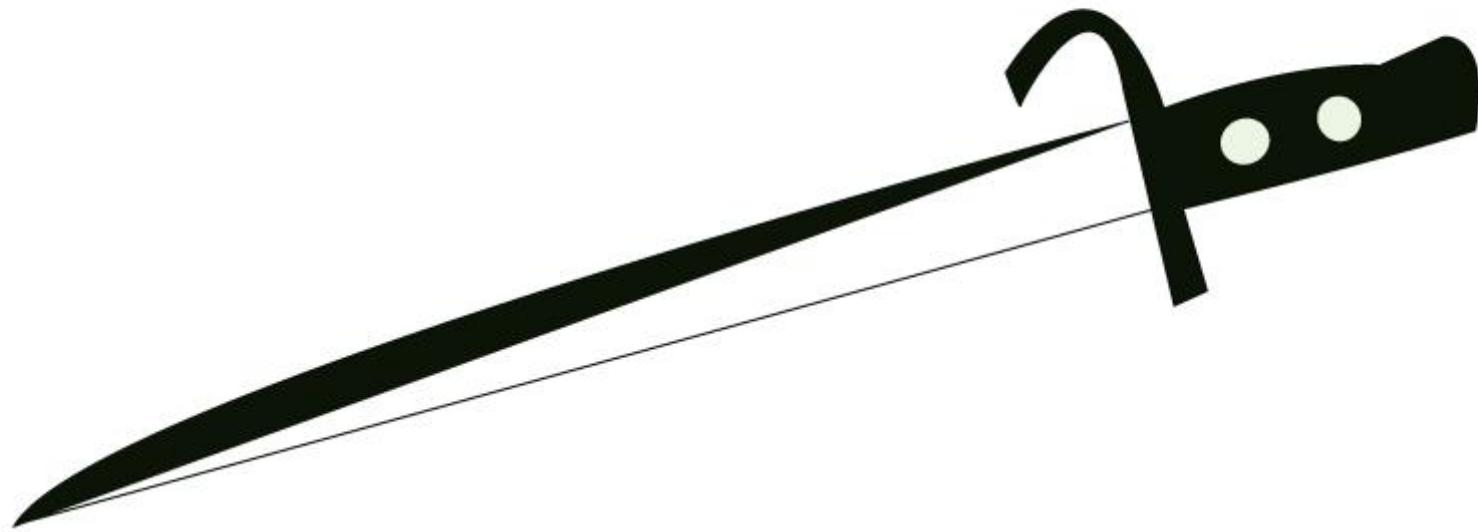




赤い影法師

Красный

Силуэт



僕はドミトリーが大嫌いだ。

子供のころから村で僕をいじめていた。あまつさえ、平民でありながら士官学校を出て一人前の男となつたつもりの僕を皆の前でからかつた。ドミトリーにとつて僕はいまだにトルスリイヴィ（弱虫）アレクセイなのだつたのだろう。そこまでは別に耐えられた。

問題はあいつがその上に彼女の前で僕を殴つたことだろう。仮にも侯爵が聯隊所持者の聯隊の将校に暴力を振るつたのだ。その場でシャシュカ（龍騎兵刀）で切り捨てても良かつた。いや、そうすべきだった。（実際士官学校での鉄拳制裁に比べれば痛くも痒くもなかつた）だができなかつた。こんな男でも守るべき民の一人、軍人の暴力はただ、祖国の敵、神と皇帝陛下に背く者のみに向けられるもの、という教えがそうさせなかつた。

いや、言い訳だろう。やはりあの時僕は意氣地がなかつた。それだけだ。ゾーヤは、彼女は、そのときには、僕の在り方は正しいと言つてくれた。それだけが慰めだつた。

ドミトリーはその後すぐ窃盗で逮捕された。噂ではヴオール・フ・ザコーネ（撻を守る泥棒・犯罪者組織のこと）と十代前半から付き合いがあつたともいわれた。

ドミトリーが刑務所に入った話を風の噂に聞いたころ、将校として順風満帆だった僕は特に気にも留めなかつた。子供にも恵まれ、ゾーヤとの新婚生活が順調だつたこともその理由の一つだ。

革命が全てを変えた。

皇帝陛下が退位し臨時政府ができたことを僕は東部戦線で聞いた。

二年前の屈辱的な大撤退、前の年のブルシイロフ将軍の大攻勢の戦略的敗北と劣勢がつづき、やつと戦線が膠着した、というよりロシア側に攻勢能力がなくなりニメヤスキイ（ドイツ人）たちの興味が西部戦線にうつった1917年2月のことだ。

壊滅的打撃をうけ、武器弾薬人員の補充など夢にも思えない状況下で、ぼんやりとウオトカをおりながら聞いたその知らせに、僕は怒りを覚えた。だが、臨時政府についた上官に意見する勇気はなかつた。将軍たちは余りにも疲弊した軍の現状から皇帝ではなく臨時政府を支持した。

状況はめまぐるしく変わつた。

10月に臨時政府がボルシェビキの人民評議会（ソヴィエト）に取つて変わられ、僕の軍団もその指揮下に横滑りしたのだが、翌1918年2月には、ほとんど回復していない状態でその機に攻勢をかけてきたニメヤスキイの大攻勢からひたすら敗走するはめになつた。

後で聞いた話だが、初めはニメヤスキイと講和するつもりだつたらしいが、ウクライナの領有権で決裂した結果らしい。

この敗北の後ボルシェビキはニメヤスキイと講和した。

時系列は前後するが、この大攻勢に押され、前線に近づきすぎた。ペテログラードは放棄された。

僕の所属する部隊はボルシェビキを支持したため、僕は労農赤軍の一員となり新たな首都モスクワの警護を命令された。僕はと言えば、家族のために、と命令に唯々諾々を従っていた。

そのころ反ボルシェビキを掲げた勢力はいくつかあったが、最も有力だったものは極東のコルチャーキ提督だったが、首都近くではフィンランディア（フィンランド）から迫るユーデニチ将軍だった。その軍内の独立を望むフィンスキイたちのユーデニチへの反発につけ込み、攻勢を頓挫させることにボルシェビキは成功した。しかし、今度は数世紀ぶりに独立したボルスキイ（ボーランド）との戦争が始まった。

次はどこに投入されるのか、などとのんきに僕は上官や同僚たちと軍務に追われていた。

甘かった。

ボルシェビキは、まだ祖国の内側を疑っていた。

僕は上官や同僚とともに反革命派のシンパとみなされ、唐突に拘束され処刑を待つ身となつた。

しかし、僕は処刑されなかつた。それどころか理由もあいまいに釈放された。そのまま処刑されなかつたかもしれない。

あつたのは、自分で助かつたと言う凄まじい罪悪感のみだつた。僕の上官も同僚も、今なお反逆者の汚名が、その建てられすらしなかつた墓標に刻まれている。彼らが祖国に忠実な良き軍人達だつたと知つている者は、僕しかいなくなつた。恥すべきことは、今の僕が感じることは、その罪悪感すら薄れかけていることへの罪悪感だ。

僕に手を差し伸べたのはドミトリーイだつた。ドミトリーイは獄中で革命家のシンパになり、党员としてそれなりの地位にいたのだ。

ゾーヤには会うことはできなかつた。ただ離婚を告げる事務的な手紙が届いていた。僕の助命のためにドミトリーイに嘆願したようだ。その代償は口に出したくない。後は男女の世界で起つる弱肉強食である。ゾーヤもゾーヤともうけた娘たちも以来はドミトリーイの庇護下にいるのである。僕はといえば処刑こそされなかつたが収容所送りとなつた。

次にゾーヤを見たのは収容所に向かう囚人列車を党幹部たちが革命の正当性を民衆に演説し罵倒を込めて送り出した時である。

忘れもしない 1920 年のロジュディスティヴォ（クリスマス）僕は多くの囚人たちとともに列車に積み込まれた。

壇上に居並ぶ党员夫妻たちのうちの一組、ドミトリーイとその腕に抱かれたゾーヤと目があつた気がした。彼女たちは僕を嘲笑しているようにみえた。

きつと思い過ぎしなのだろう。そもそも何両も連なった囚人列車の中で僕を探しめてゐることができるはずがない。だがそう思おうとしてもその後の地獄のそのものの収容所生活では無駄だった。

かつては高貴であつたり、社会的に認められていた人々が極寒の絶東で次々に息絶え、僕自身も全身凍傷に侵され両手足の指の本数は半分になつた。そんな悲哀と苦痛にまみれた生活の中で、最後に見たゾーヤの表情はどうしようもなく僕を苛んだ。その苦痛は一人だけからうじて生き残つたことへの罪悪感よりもさるに大きかつた。例え僕がどんなことになつても、僕の心はゾーヤに帰ることができるという確信が打ち砕かれたからだ。

それは、復讐を心に決めて生きる糧とするような男らしいものではなかつた。ただただ、自分の人生の選択を嘆き、悲哀にまみれ、それでいて自らこの恥辱を終わらせることもできず、また天も僕を殺してはくれない日々に凍り付いて滴らぬ涙をとめどなく流すという、どうしようもなく女々しいものだつた。

収容所の寝室の壁に日にちを刻むことをやめてから幾月が過ぎたころだらう。出所の通告があつた。

収容されて二年以上がたつてゐた。そのころコムニシティスカヤ・パルティア（共産党）を名乗り始めたボルシエビキは、敗北こそしなかつたが、ポルスキイとの戦争に失敗し、革命を周囲の帝国主義諸国（要は帝政時代からの仮想敵国をそう呼んでいるだけ）から守るために、より強固な軍事力を持つことが決定したらしい。そのために特に軍事、重工業の運用法を知るものと、技術開発に欠かせない物理学や数学などの科学的知識のあるものが優先的に、革命とその理念、及びそれを実践する党への忠誠を条件に収容所からその専門分野に移されるらしい。

ボグ（神）やユースティーツア（正義）について考へるにはあまりにもすり減つてゐた僕の精神は機械的に忠誠を誓い書面に署名した。

そのまま絶東の極東軍で歩兵の育成を担当させられた。

僕の精神は何處までも主体性がないらしい。一時は怒りと恐れしか感じなかつた赤軍に編入されたのにもかかわらず、僕は自分が育成を任せられた部隊に、そして認めたくないが赤軍という組織に、自分の兵たちが一人前になつてゆくにつれて愛着を感じ始めていた。少なくとも彼ら兵士は祖国を守る軍人なのだ、と思うようになつたのだ。

階級は少尉に降格され、小隊指揮を任せただけだつたが、待遇は悪くなかった。シャシユカは腰に提げないが、将校は一様にナガン拳銃を下げていた。帝政時代そのままだつた収容される前より合理的だ。

だがそのわずかな上向きの気分もすぐに冷めた。

ドミトリイがコミッサラ・ポリティカ（政治委員）として僕の部隊の所属する狙撃聯隊の

別部隊に配属されていたのだ。ご丁寧に家族を、つまり自分の妻としてゾーヤを、子供として僕の娘たちを連れてだ。

また、而え難い苦痛に襲われた。そこについたのはたたたた自分の運命への冷笑だった。

大規模な戦闘はなく、僕は赤軍将校として大過なく出世し、気が付けば革命から二十年以上たつた。

しかし収容所を出て以来十五年ドミトリイは、配属された部隊こそ違つたが必ず僕の部隊と同じ上級部隊に所属する部隊の政治委員としてほとんど同じ階級で常にそばにいた。その十五年間ドミトリイともゾーヤとも言葉を交わすことはなかつた。だが、上級部隊を同じくするということは、同じ駐屯地近くに住んでいいのだ。いやでも目に入る。

腕を組み楽し気に語すドミニトリイと、ソーヤーが「で、僕に向かってくれた笑みと変わらぬか、それ以上の朗らかな笑みがドミニトリイに向けられていた。子供たちもドミニトリイを父親として受け入れているようだ。

彼ら家族から僕に接触してくることはなかつた。僕も彼らに対し何かしようと思う気力がなかつた。

僕は彼らに顔を合わすことの無いよう、できるだけ早く登序し、できるだけ遅くまで仕事をした。加えて、自分のもつ全能力を軍務に傾けることで、ドミトリイとゾーヤと子供たちのことを思考に上らせることが無いようにした。

十五年という歳月は僕を見かけ上筋金入りの共産主義者にするには十分な時間だつたらしい。赤軍少佐として極東軍のモンゴルリヤに駐留する第57特別軍団麾下師団の第142車載狙撃聯隊の聯隊長を任せられた。

機関紙に採用されるという機会にも恵まれ、順調に赤軍内での立場を固めていた。

軍務それ自体はやりかいのある仕事なのだ。僕はたゞ政体が変わつて、期曉と虚餉にまみれた国になつたとしても軍人として祖国につくしたいのだ。

い感情を濶の「ご」とく蓄積させるにもだ。それなりの地位にあつたのにも関わらず若い妻を娶る気にならなかつたのもそのためだ。

その感情はドミトリイが僕の聯隊の聯隊政治委員として配属されたとき決定的になつた。

もう人生の折り返しに来たというのに、毎日ドミトリイと顔を合わせることで、心の奥底にしまい込んだ暗い感情はそれなりに澄んだ泉の底の泥をかき混ぜて濁らせるかの」とく、

僕の精神を食んだ

理屈ではこの男は僕の命の恩人かもしれない。だがその恩義もたまたま僕が極寒のシベ

リアの収容所で生き延びたからだ。このような感情を憎悪というのだろう。

トハチエフスキイ元帥を始めとし、下は下士官兵にいたるまで赤軍内で反革命分子が次々と告発され、処刑されていたのもそのころだった。反革命分子とされたのは、党員軍人である政治委員やあくまで末端でしかない兵卒を除くと、ほぼ皆、帝政時代からの専門家たちが主だった。そろそろ用済みになつたのだろうか。

祖国の西でも東でも帝国主義者たちの活動が活発化していたが、それ以上に党中央は赤軍内部の肅清に御執心らしい。

僕もリストに載るだろうか。内戦のころ一度はリストに乗つた身だ。僕よりも優秀な者たちが次々と処刑されている。ドミトリイへの憎悪が日増しに大きくなるというのに、生来の小心から、次は自分が、と見知つた人間の名を“反革命分子”“帝国主義列強の内通者”として軍政治局の機関紙で見るたびにおびえていた。

僕は何におびえているのか、ただ自分が殺されてしまうことにおびえているのではあるまい。正直になれ、そうちドミトリイに、そして僕を見捨てたゾーヤに復讐することができなくなることが嫌なのだ。

決して意識には上らせないようにしていた感情。おそらくは愛しいゾーヤのことを考えて、そうしてきた感情。

ドミトリイとゾーヤを殺したい、できるだけ苦しめ、許しを請わせてから殺したい。自分の地位と命が中央の鼻息で簡単に搔き消えるともし火に過ぎないと自覚すればするほど、その感情は濃厚になつた。

結局僕はマリクア・コントラエヴォリューツェア（反革命分子）のレッテルを貼られる」とはなかつた。

このソヴィエト・ロシアという魔境で僕のような凡人が生き残るはどうゆうことなのだろう。

僕は自身が抱いた疑問に真摯に答えるべきだったかもしれない。

第57特別軍団軍団司令部からの出頭命令があつたのは、モンゴルリヤ・マンジュウルリヤ国境での軍事衝突に關することだろう。そう高を括つていた。既に昨年にはオジュウラ・ハサン（ハサン湖・張鼓峰事件のこと）にて衝突がおきていたのだ。通常、動員開始には正式命令で動員される各師団を経て上級司令部から命令が下るものだが、単なる訓示ということだった。師団を飛び越えての命令には何か秘匿性の高い作戦を同志軍司令官はお考えなのだろう、あるいは師団を再編し僕の聯隊は軍団司令部直属になるのかもしれない、などと勝

軍団司令部への出頭ということは、早晚予測されるモンゴルリヤ・マンジュウルリヤ国境での軍事衝突に關することだろう。そう高を括つていた。既に昨年にはオジュウラ・ハサン（ハサン湖・張鼓峰事件のこと）にて衝突がおきていたのだ。通常、動員開始には正式命令で動員される各師団を経て上級司令部から命令が下るものだが、単なる訓示ということだった。師団を飛び越えての命令には何か秘匿性の高い作戦を同志軍司令官はお考えなのだろう、あるいは師団を再編し僕の聯隊は軍団司令部直属になるのかもしれない、などと勝

手に思い込んでいた。何故僕はこれほど小心のくせに、人生の、”……”と言う時にはいつもぼんやりとしているのだろうか。

期待は裏切られた。

司令官執務室に入つてみると、向かい合う形の二人掛けソファ二つに座つた三人の男が僕を見た。

コマンディア・コルポスウア（軍団司令官）、コルポスウア・ポリトラボニク（軍団政治委員）ここまでいい。もう一人いた。

一見歩兵にも見える制服を着た男の腕章には防諜の象徴たる盾と諜報の象徴としての剣があしらわれている。

ナロウディニ・コミスウリア・ブノツトリニイ・ディオ（内務人民委員）。通称 NKVD だ。

「これは。」

僕は言葉に詰まつた。即座に理解した。ああついに自分の番が来たか。己の陽と陰の二つの欲望。軍人として祖国に尽くしたいという意志も、憎悪する者を殺したいという妄執もいざれもはたされることなく、僕は無様に死ぬのか。

「同志ヴォルコフ少佐、なにを突つ立つていて。早く掛けたまえ。」

軍司令官が私にソファを勧めた。僕が座ると入れ替わるように軍団司令官は立ち上がり、窓に向かい僕たちに背をむけ言つた。ヴォルコフとは赤軍での僕の名前だ。

正確にはヴォルコフ（Volkov）ではなくヴォルコファ（Volkova）なのだが、どこかで『がぬけたのだろう。十五年間修正しなかつた自分の姓誤りなど今はどうでもよいはずな』のだが、動搖で思考が現実逃避しているらしい。

「同志少佐、君は革命とその前衛たる党への裏切り者にはどう報いるべきと思うかね。」

「同志軍団司令官。自分は」

言葉はさえぎられた。

「同志軍団司令官、裏切り者は彼ではありません。」

「同志軍団政治委員、同志少佐に質問を。」  
NKVD の男だった。目の前に座るその男の目は爬虫類を思わせた。彼は軍団司令官が言葉を継ぐ前に続けた。

明らかに上位者に対する発言であるのにもかかわらず、有無を言わせぬ様子だった。今この部屋でもっとも権力を持つものは、辺境の軍人ではなく、首都の政治中枢に直接通じているこの男なのだ。軍団政治委員はそのことをよく理解しているのか、促されるまま僕に声をかけた。

「同志少佐、プロホロフ聯隊政治委員とは浅からぬ仲だな。」

全身の血が凍結して逆流する思いがした。プロホロフとはドミトリーの姓だ。軍人として上位者に質問されれば答えねばならない。だが喉が閉まり切つたように、僕は声を出せなか

つた。

軍団政治委員はよく見ると少し青ざめた顔だった。質問を、と言われたのにも関わらず、彼はそれ以上何も言いださなかつた。

「同志少佐とプロホロフ聯隊政治委員はたしか同郷でしたね。かたや極東軍氣鋭の将校、かたや活動当初から革命に貢献した党員、まさに我らの革命を象徴するかのような一人です。」やわらかい笑みを口元のみにうかべ、相変わらず爬虫類のごとき目つきで NKVD の男は再び口を開いた。この男は僕とドミトリーの間のゾーヤに関することも当然知つてゐるのだろう。

「故に残念です。」

彼の隣の軍団政治委員は目を伏させていた。

「彼には金で革命を、イヤポンスキー（日本人）に、帝国主義者どもに売り渡した疑いが掛けられています。」

男は一旦言葉を切つた。こちらを実験対象でも観察するかのように見つめている。

「何か思い当たることはありますか。タバリシュイ・マーヨイルア（同志少佐）」

「疑いでですか。」

「現在モンゴルリヤとマンジュウリヤ国境に帝国主義者の軍隊とその傀儡の軍隊が野心を燃やしています。共産主義の同志として、わが赤軍はモンゴルリヤを助け、これを撃退しなければなりません。」

男は残りの二人も観察対象としたようだ。軍団司令官の背を面白そうに眺め、隣の彼に目を合わせようともしない軍団政治委員の顔を楽し気に覗き込んだ。

十分実験を堪能したのか、また彼は僕を見た。

「しかし、悲しむべきことに、わが国には革命の理想を目先の小金で売り渡そうとする裏切り者が帝国主義者どもの手によって、深く根を張つていています。先日オジュウラ・ハサンでの衝突があつたところです。その際総司令官ブリュヘルは意図的に軍の指揮を誤り、赤軍兵士に多大な犠牲を強いました。さらに恥すべきことに、それを未然に防ぐべき地位にいた極東内務人民委員部長たるリュシコフはあらうことか敵の庇護下に逃れました。」

「私にはプロホロフ聯隊政治委員から裏切り物の兆候を見出することは出来ませんでした。自分でも思いもしない言葉が口をついて出た。なぜ僕はドミトリーをかばうのだろう。いやかばつてなどいない。ただ戸惑つて正直に告げていいだけだ。」

「同志少佐、情けは時に悪徳です。」

男は立ち合がり、僕の肩に手を置き言つた。

「いざれにせよ、私は伝えるべきことは伝えました。われわれ中央内務人民委員が反革命分子を告発するということは、十分なる証拠なくには決してありえないのです。もし疑いが疑いですますなくなつたとき、プロホロフ聯隊政治委員の家族も、友人も、仕事をともにしていた者も、当然スペイ隠匿の嫌疑がかかります。それをお忘れなく。」

そう告げて上位者達への敬礼もなく NKVD の男は部屋から去つた。

沈黙が部屋を支配した。司令部施設の正面玄関から高級車のエンジン音が去つて行く。まるでの男がこの建物去ることを完全に確認してからでないと口を開くことが出来なかつたとでも言うようだ。軍団司令官はやつと沈黙を破つた。

「同志軍団政治委員、一つ質問したい。もし政治委員が反革命分子と明確になつた場合。」「その場合、当然その時点で政治委員ではなくなります。反革命分子を処理することは、いかなる共産党党規則の罰則及び赤軍刑法の罰則にも該当しません。」

相変わらず青ざめた顔の軍団政治委員は腿に両腕をかけ、うつむいて答えた。  
「そうか。同志少佐、イaponsスキイとの衝突が本格的に始まる前にわが軍団はその浄化につとめたい。だが反革命分子は狡猾だ。けつして尻尾を見せないかもしない。せめて衝突が完全に終結する前に軍団の正常化につとめることが、反革命分子に決定的な裏切りをさせない手段と本職は考える。」

どうやら僕は予測される次なるイaponsスキイとの軍事衝突のさなかにドミトリーを殺さねばならないらしい。あれほど憎悪したはずの男なのに、僕はいきなりのことへの驚きと、生来の意氣地のなさから、最後の抵抗をこころみた。

「同志軍団司令官、質問があります。これは私への命令でしょうか。」

「そうだ、正式な命令だ。ただし秘匿すべき事象のため、文書なしの口頭命令だ。」

軍団司令官はいまだに窓に向いたままだ。その表情は分からぬ。

「君の任務はプロホロフ聯隊政治委員がイaponsスキイの帝国主義者とつながつてゐるところでも疑われた場合、いや、革命に反逆する者と判断した場合、適切に処理することだ。」「同志軍団政治委員、党員たる政治委員に問題があつた場合、党規にのつとり処分がなされることが適切と考えますが。」

こんな賢い質問をする者はこの国で長生きできない。赤軍に忠誠を誓つて以来、骨身にしみて弁えていたことだ。

やはり、まるでこれでは僕がドミトリーをかばつてゐるようではないか。いや、やはり僕はゾーヤを愛してゐるのか。それとも娘たちをかばつてゐるのか。この国は女子供とて反逆者とされた者には容赦しない。

反革命分子？裏切り者？今この国でまともに生活できているもので、裏切り者でないものなどいるのか。神を裏切り、祖国を裏切り、自らの信念、信義を叩き売り、誰かの場所を奪い取つた者しかいなかないではないか。あのNKVDの男も、この軍団司令官も、軍団政治委員も、ドミトリーもゾーヤも、そしてこの僕自身も。

ストーブを充分炊いた部屋であるというのに、軍団政治員の青ざめた顔は唇まで血の気が引いていた。

「同志少佐、君の言い分はもつともだ。しかし、こゝは絶東の帝国主義者どもへ対する最前線だ。くわえて宣戦布告こそないが、今は実質戦時だ。忠良なる赤軍兵士たちに動搖を与えることはできない。君に任せるしかないのだ。」

さすが口先だけで出世が決まる党員軍人だ。いかにももつともらしい」とを言わせれば並ぶものは無い。

これ以上質問しても無駄だろう。この男のうまい言い回しの残弾が枯渇する前に、僕の赤軍将校としての命運が尽きる。

さきほどまでいた NKVD、軍団首脳、あるいは極東軍上層部、党極東支部、考えたくもないが中央、いつたい何処の誰にどのような疑惑があるのか。このうちの誰が彼を殺すことを決定したのか。いずれも僕は知りえない。

ただわかつたことは、僕はドミトリイを殺す大義名分を得たということだ。愛しく憎いゾーヤも、血を分けた娘たちも、そのついでに収容所おくれにでもなるだろう。

5月13日イヤポンスキーの傀儡のマンジュウルスキーがモンゴルリヤ国境を侵犯してきた。これに対し我が第57特別軍団に出動命令が出た。

国境に進出する戦力として僕の聯隊にも動員命令が下つたため、聯隊司令部で聯隊參謀と政治委員で移動計画の立案と現在の戦況について確認を行つた。

イヤポンスキーはまず航空機によって上空の優勢を保とうとしているらしい。敵情に関する報告の最後に最も都合の悪い報告が来た。帝政時代からこの国の、わが祖国の軍人の悪癖だ。いや組織に生きる人間普遍の生態というべきか。

「わが空軍の航空機はイヤポンスキーの戦闘機に次々と落とされているようですね。」

元ゴロツキとは思えぬ丁寧な話し方で、ドミトリイがその報告に付け加えた。肅清の嵐が吹き荒れているのに、いやお前ももうすぐその犠牲者の一人となるのに、なんとも物怖じせぬ言い方だ。中央の機嫌をそこねた高級指揮官が、良くて更迭、悪ければ左遷という名の处罚の順番待ちの椅子に座つているというのに。

収容所から帰つて十五年近く、こいつと軍人としてもまともに口を利いた事はない。同じ聯隊に配属になつてからも、話すことは最低限の事務的なことばかりだ。

「第57特別軍団は即座にこれを迎え撃ちます。現在敵の航空戦力は脅威ですが、地上戦力は貧弱です。そもそもわが赤軍の地上戦力の軍事的優位は1935年以降、我が戦力が敵の單純な兵員数のみでも三倍となり、火力比はさらに差をつけ、完全なものとなつています。適切な戦力集結を行えば敵戦力の駆逐はたやすいことです。」

若手の参謀がムツとした声色で言つた。

「適切に行えればな。」

ドミトリイは挑発的に言つた。この時点では軍の方針への批判ととられかねない。この場の誰一人そのようなことを言わない理由は、ドミトリイが聯隊政治委員という事実上最も高い権威を持つ者であるからである。

「タムスクまでの移動の所要時間は。」

僕はドミトリイの言葉を遮るように言つた。

「はつ、途中バールンウルトにて補給を受けますので三日間で到着するかと。こちらが行動

計画書です。」

すでに策定された計画書に目を通す。移動計画、武器弾薬食料燃料の補充、人員、戦闘序列、速やかに且つ事細かに確認する。政治委員であるドミトリイにも渡す。特に確認する」とはないという小馬鹿にしたような表情でざつと目を通すと僕に書類をつき返してきた。その態度はいつものように不愉快だった。

その不満をこれまた常の」とく、つとめて顔に出さぬようにし、決済の署名をし、印を押す。

「結構。では聯隊長より命令。聯隊は行動を開始せよ。」

27日、前日にはタムスクに聯隊は遅れることなく集結した。

翌28日補給、兵員の休養等業務をこなしていると、ハルハ河西岸に敵進出との報告をうけた。すでに国境に進出した部隊と交戦状態に入ったようだ。

越境してきた敵部隊はイヤポンスキイの歩兵数個大隊規模にマンジュウルスキイ（満州人）の騎兵が一中隊規模だ。恐らくは師団偵察だろう。国境警備のモンゴルリヤ人民軍を追い散らし、ハルハ河に敵は至った。どうやら敵のかねてから主張していた国境線で停止したようだ。

すでに国境付近に進出していた戦力集結を完了させていた我が軍は、戦車を中心に攻勢にでたようだ。完全に敵の虚をついたようだが、敵の抵抗も頑強のようである。戦略予備されていて我が第142車載狙撃聯隊にも進出命令がでた。交戦域はタムスクから目と鼻の先であるが、部隊間の無線連絡がうまくついていないらしい。どこに進出すべきか判断できない。独自に偵察分隊を無理矢理六分隊派遣したが、戦況は判然とせず、その損耗も無視できなくなってきた。

前線の詳細な状況も持つて来ず、ただ漠然と増援命令を繰り返すのみの連絡将校を何人も蹴り返し、正確な進出先の命令書を受けた時には、すでに夕刻であった。指定された交戦地域にわが聯隊が到着する頃には日没を過ぎた時間になってしまった。

とにかく命令には服従せねばならない。輸送車に可能なかぎりの高速を出させ、できるだけ早く戦域に到達しようとしたが、やはり日没には間に合わなかつた。

夜間であつたため、こちらの輸送車両の前照灯で補足され、敵陣地からおそらくは10セント以上の口径の機関銃の射撃を受け、先頭車両を含む前方の車両数両が兵員もろとも撃破された。その炎の明かりを利用し敵は突撃を敢行してきた。前方に進出したT26戦車数両に敵兵が群がつたらしい。対抗するために歩兵は到着し次第小隊長が各個に判断して応射しているようだ・

「これは、まずいですな。」

指揮車両に同乗していたドミトリイは口元をにやけさせながら、炎上する我が軍の車両に照らし出された前方の悲惨な状況を眺めていた。至近の地面には発砲音とほぼ同時に弾丸が跳ねている。敵の突撃力は想定以上、おそらく小銃の有効射程まで浸透していると見てよ

いだろう。明らかにロシア語ではない雄叫びが接近している。加えて奇襲によりわが聯隊は混乱中だ。

小銃弾程度なら防ぎ得る装甲が施された指揮車を盾にするように停めさせ、その陰に直属の司令部要員と運転手と護衛、そしてドミトリイとともに降車した。

状況判断が必要だ。今るべき行動はただ一つだった。

「一旦、態勢を立て直す。撤退するぞ。おいお前たち、機関銃中隊各隊に伝令。『機関銃中隊各隊は前進後散開、敵陣地に向け制圧射撃、並びに前衛への支援射撃、前衛部隊撤退を支援、過半の友軍の撤退を確認後後退せよ。弾薬は半数までの消耗を可とする。』だ。」

同乗していた司令部の下士官数名を後方にいる機関銃中隊に伝令にはしらせた。

「同志少尉、聯隊司令部の部隊から小隊を抽出し、二分して前衛と後方の全部隊に撤退を伝えろ。」

また、僕たちと同じく停車し、装甲車を盾に応戦していた隣の車両の司令部直属小隊を分散して全隊に撤退を告げる伝令に走らせた。彼らのうちどれほどがその役目を果たすかは賭けだが、無線が信用できない以上これしかない。無論雜音しか発しない無線にも、一応同様の命令を流す。

指揮車両には運転手と護衛の兵士二名を除き僕とドミトリイだけになつた。

「敵前逃亡ですかな。」

ドミトリイは他人事のように言つた。こいつはそれをさせないためにいる。

「このまま混戦に付き合つても無意味だ。統制を取り戻し明日払暁に再度攻撃する。」

今ここでこいつを殺すか。乱戦で戦死したことにできる。

腰の拳銃にそつと手が伸びた。

敵は土嚢や塹壕による即席陣地を構築しているらしい。炎の明かりで照らされた敵情をよく観察しながら撤退しきれるか頭を巡らせた。

後方から六台機関銃中隊の車両が進出してきた。即座に展開し敵陣地に向けて制圧射撃を始める。

彼らの弾薬が半分に減るまでに前方から後退がなければ、前衛は見殺しにするしかなさそうだ。

「前衛の味方」と砲撃しろとでもいうのか。」

「砲兵中隊に支援させつつ、聯隊主力を突撃させてはいかがです。兵員火力いすれも我らが勝つていい。」

「前衛の味方」と砲撃しろとでもいうのか。」

「どうドミトリイの軽率な発言を批難している僕自身、浸透している敵もろとも味方の前衛に機銃で射撃を加えさせている。それでも砲撃で吹き飛ばすよりはましなのだ。ドミトリイの発言はいたずらに味方の損害を増やそうとしているようにしか見えない。」

指揮官の状況判断を妨害し、自軍の損害をいたずらに増やそうとする。世界大戦以来の苛烈な戦闘下で僕は確信した。

こいつは軍を裏切った。

今一度腰の拳銃にそっと手を伸ばす。

拳銃嚢の留め金をそっと外し、遊底を静かに引き、撃鉄は上がったままにしておく。

前方では、敵の追撃が始まっている。

敵は機械化歩兵ではない、すでに至近まで迫った敵が車両に乗り切れなかつた味方の兵士に銃剣を突き立て、逃走するわが軍の車両に銃撃を加えているが、機械化歩兵であるわれわれの撤退速度に追随できない。くわえて、遭遇劈頭に先頭車両を破壊した機関銃が敵の最大火力のようだ。砲を持っていない以上偵察目的の部隊とみなした当初の判断は正しいのだろう。手榴弾程度は所持している可能性はあるが、砲撃による損害のおそれは考慮から外してよい。敵兵の脅威はその兵士各個の驚くべき練度と戦意のみだ。

独特なエンジン音とともに、兵員輸送車が後退してきた。

「運転手乗車しろ。我々も撤退するぞ。お前たちもだ。」

本来指揮官より先に護衛が乗車することはない。だが、命令されたこと、なにより司令部に直属の兵士だけあって、運転手も彼らは優秀だった。乗車すると、こちらに背を向け、目前まで迫っていた敵にそれぞれ拳銃と小銃で牽制射撃を加えだした。

「同志聯隊長、早くお乗りください。」

いかにも古参兵という風体の兵士の一人が敵を一人射殺しつつ背を向けたまま言つた。

「わかった。」

「同志政治委員、乗れ。」

先にドミトリーに乗車するよううながす。疑いもなくこちらに背を向ける。味方でこちらを見ているものはいない。銃声と怒号とエンジン音が周囲から音を消した。

後頭部に一つ、心臓に一つ。

ドミトリーイだつたものは崩れ落ちた。

即座に拳銃を敵に向けて構え弾倉が尽きるまで射撃する。

「政治委員がやられた。」

白々しく叫ぶ。

「出せ、主力に合流しろ。」

車両の装甲に敵弾がリズムを奏でている。

完全に引き離してから、各大隊と聯隊直卒の砲、及び機関銃中隊に対し、半数に休養を取り、交代で警戒態勢を維持させる。無論、各車両を散開させることも付け加える。ガソリンエンジンの我が軍の車両は、密集は自殺行為だ。

日の出までの数時間が永遠化と思われた。

翌朝、今一度敵情を観察した。どうやら我が聯隊が昨晩遭遇した敵は二個中隊規模で、かなり突出しているようだ。我々が撤退した後、夜陰に乘じ撤退されるかとも考えたが、先行したわが軍により敵主力から分断されているらしい。

ついにドミトリイを殺したことを思い出し喜悦の笑みが浮かんだ。だが、復讐に燃える兵士たちにとって、単にそれは意氣軒昂な指揮官にしか見えないはずだ。

「昨晩の敵討ちだ。」

笑みを浮かべたまま聯隊参謀たちに作戦を指示する。

僕の笑みは、目論見通りに誤解されたらしく、将兵皆、やつてやろう、と士気の高さを表す健全な笑みを浮かべて任務に励んでくれた。

奇を衒う必要はない。聯隊砲兵に支援砲撃を加えさせ、化学戦車（火炎放射戦車）を中心に戦兵を随伴させつつ陣地を攻撃した。

敵が防壁代わりにしていた一台だけの装甲車両を聯隊砲兵の砲撃が撃破し、化学戦車がその射程まで敵陣地に前進に成功すると、僕は勝利を確信した。

火炎放射に耐え兼ね陣地を放棄した敵は、突撃を敢行してきた。やはり恐るべき戦意である。しかし歩兵数のみでも我々が圧倒している。一部で突破を許し、數個分隊規模の死傷者を出したが、数分もせずに敵の殲滅に成功した。

「みごとな指揮でした同志聯隊長。」  
作戦参謀の一人が言つた。

「ああ、残敵に注意せねばな。」

自分でも驚くほどの朗らかな声色だ。

この二日間の戦闘でわが軍は国境線の確保という目標を達成したものの、多大な損害を被つた。

僕は今後の情報収集のために、壊滅した敵陣地を捜索し、文書の類を探したが、さすがに敵もまともな軍人らしく、そのような情報を示すものは何一つ残つていなかつた。兵士の死体一つ一つを裸に剥いて調べさせ、終われば服をきせ安置するという作業を部下に課すと、は若い小隊長の一人が

「帝国主義者の死体に氣を使うのですか。」

と聞いてきた。

「少なくとも兵士として兵士の敬意を表すべきだ。」  
「馬鹿けた質問をしました。」

本来なら、彼らはあくまで帝国主義的ブルジョア政府の犠牲者だ、とか敬意を受けるに足る行動によって、わがソヴィエトの威信が高まる、といった気の利いた一言をつけるべきだつたのだろうが、ここには兵士しかいないのだ。この若い小隊長も納得したようだ。

ドミトリーイの戦死を受けて、各大隊以下の政治委員たちは、こちらを恐る恐る覗うそぶりがあるだけだ。

「かまわん。昨晩負傷した友軍の兵士が生きているかもしだぬ、そちらもよく注意せよ。」

生来の小心が鎌首をもたげた。ドミトリーイの死体を確認すべきだろう。不安は杞憂に終わった。後頭部からの貫通弾で顔面が半分吹き飛んでいたが、政治委員の腕章をつけたドミトリーイの死体が発見されたと報告を受けた。死体を確認した。ステップの味気ない草原に奴の頭蓋は花をさかせていた。

二十年来の宿願を果たしたため、心理的には晴れやかだつた。

だが公人として、軍人としての仕事はまだ残つていて。

戦闘が昨晩と今日の午前だけで終わるはずがない。あれは間違いなく、師団規模の部隊が派遣した捜索聯隊の一部隊であり、軍団全体で敵を押し返したとはいえ、敵軍がマンジ ュウルリヤに展開している兵力を考えても戦略予備を投入してくるであろうことは、容易に予測できる。

いかに我が極東軍との地上戦力差が大きいといえど、航空戦力と兵士の練度はわが軍にまさる。おそらくは交代が来るまで、一帯の保持の必要があるだろう。陣地構築資材、食料、弾薬、医薬品の補給要請をタムスクに、兵の補充要請をウランバートルに出す必要がある。野戦司令部とした指揮車内で補給要請に必要な書類を書き上げ、まつたく信用ならない無線通信とともに書類をタムスクとウランバートルに送つた。

指揮官としての義務をはたし、兵士の作業監督の名目で聯隊參謀数人と草原の地平と碧空をぼんやりと眺めつつタバコをふかしていると、軍団司令部から伝令が來た。

「撤退だ。」

まだ少年の面影ののこる連絡将校をにらみつけてしまつた。

怯えた彼が再度軍団司令部からの命令を震えた声で復唱するのを手を振つてとめた。彼に八つ当たりしても何の意味もない。

「同志軍団司令官は何をお考えなのか、敵に再侵攻の余力があることは明らかではないか。」事実、報告によるとわが聯隊が殲滅した部隊以外の敵は国境から下がつただけなのだ。

「敵増援が來た場合、わが軍団が危険であるとのことです。」

連絡将校は言った。馬鹿な、ならばなおさらここを保持すべきであるし、増援を受けるべきではないか。

「他の部隊の損耗はさらに激しいようですな。しかし…。」

聯隊參謀の一人が言葉を濁した。分かつていて、それ以上の軍団上層部批判を一尉官(?)としができるものではない。

「同志軍団長に意見具申をして来る。」

僕は連絡将校の車に便乗し軍団司令部に乗りこんだ。

具申は受け入れられなかつた。軍団司令は敵の大規模逆襲の恐れあり、と壊れた蓄音機のように繰り返すばかりであつた。だからこそ陣地構築が必要だ、と言う僕の意見に耳を貸すものは、軍団首脳にいなかつた。

勝てる戦闘を、戦略的に圧倒できる戦争を無駄にしたことを口惜しく思いながらも、命令に服従せねばならない。

補充と休養のため、聯隊はウランバートルの聯隊駐屯地に戻つた。

麾下部隊の戦闘詳報、戦闘行動記録を確認し、軍団への報告書を書き上げた。ここに聯隊政治委員が戦死したと付記することで、軍団長と軍団政治委員、そして彼らとつながつてゐるだらうあの NVKD の男は僕が彼らの要求にこたえたことを理解するだらう。その後聯隊の再編計画を立て聯隊參謀にこまごまと指示を出すと、すでに半日たつていた。

官舎に戻る将校専用車のスプリングの悪さに尻を小突かれながら、ドミトリーのことを考えていた。あいつは本当に反革命分子だつたのだろうか。

戦闘中の言動は僕の聯隊に損耗を強いているように感じた。だが、政治委員ならば戦闘中にいうことはあれしかない。

僕はドミトリーを私的な憎悪のままに射殺しただけかもしれない。

いや、帝国の将校となつたころ、あいつに拳の一つも食らわせられなかつた僕は、公人としての大義名分を得てやつと一撃を食らわせることができたのだ。そこでの公とは何であるかは問わない、ただ自分より強大な権威の後押しが必要だつたのだ。

僕の性根は弱虫アレクセイのままだ。もし大義名分がなければ、ドミトリーをどれほど憎んでも何もしなかつただろう。

四年前から吹き荒れる肅清の嵐はその実、首都で書記長に権力を集約させてゆく作業に過ぎないことは、だれも口にしないが、だれもが知つていた。彼が集権体制が確立したのに生き残つてゐるかは、隠れるものない雪原でブルガ（吹雪）に見舞われ、首をすくめ、過ぎ去る前に凍死するかしないかを考えるようなものだつた。体力が吹雪に耐え得れば、生き残る。革命からも生き延びたようだ。

ドミトリーを殺したこともあるいは共産主義国家の公人としてすらも全くの無駄なことだつたのかもしれない。

ゴツリと車が跳ねる。

モンゴルリヤの平原の中に異物として屹立するわが軍団の駐屯地は草原の砂塵で紅に染まつた夕日に赤く濡れていた。

孤独な休日を過ごした。官舎の自室で新聞を読みながらタバコをふかしていた。

前の配給で蓄えていたタバコの最後のひと箱を吸い尽くしたことに気が付いた。  
次の配給まで待たねばならない。

ゾーヤと娘たちの住む官舎を訪ねねばならなかつた。聯隊で高級将校が戦死した場合、政治委員であつてもその家族への戦死報告は聯隊長の職務だ。書面でもよいが、僕を捨てた女と子供がドミトリイの死にどんな反応を示すか、嗜虐的な興味がわいた。ドミトリイを殺したことで彼女と娘たちへの未練も霧散したようだ。あとは彼女たちが悲哀にまみれるさまをせいぜい見物してやろうと思つた。

ドミトリイの戦死に関する書面を書き上げた。党員としての彼の家族の処遇や残務処理は党の仕事だ。極東支部が行うだらう。

ドミトリイの家を訪ねた。家族持ちの軍人官舎は想像以上に質素なものだつた。二十代半ばくらいの女が出てきた。かつて僕の娘だつた、随分と育つたものだ。

「お母さま、お客様よ。」

女は言った。

ゾーヤが出てきた。かつての美しい面影はどこへやら、醜く太り、顔にはしわが刻まれていた。二十年越しにまともに顔を合わせる。どんな表情を見せてくれるのだろう。見捨てたかつての夫がいきなり訪ねてきたのだ。

「あら、聯隊長閣下。」

まるで他人にあつたかのように言つた。村にいたころの純朴な娘のままの声で。

「いつも夫からお話を伺つています。とても立派な方だと。」

拍子抜けしていると、中に勧められた。なんだこれは。ゾーヤは僕を見て何も思わないのか。

「お茶です。」

女がジャムをたっぷりと入れた紅茶を持って來た。

「どうぞごゆつくり、聯隊長閣下。」

朗らかな笑みを浮かべ女は下がつた。

「あらあら、ごめんなさいね。口の利き方も知らない娘で、もう二十五にもなるのだから、どこかにお嫁にやらないといけないのに。下の娘のほうが先にお嫁に行つてしまつて、夫が次帰つてくるときは、若い軍人さんを紹介すると張り切つてまして。」

まるで平穏な家庭そのものといったその雰囲気に僕はなんと切り出して良いかわからなくなつた。

「本当の娘ではないのに、夫は娘を本当にかわいがつてゐるんです。前の夫は革命のころ、いえ、二十年ほど前に生き別れてしまつて…。夫は前の夫に負い目を感じていたようで、前の夫と分かれなくてはいけなくなつた時からずっと私たち親子の面相を見ててくれているのです。」

眩暈がした。

僕がその本当の夫で、本当の父親であるはずなのに、まるでこの光景は、僕とゾーヤとの結婚などなくて、ゾーヤは誰か別の男と娘たちをもうけ、その夫と死別し、ドミトリイと再婚したかのようだった。

「前の夫はアレクセイ＝ヴォルコワというのです。聯隊長閣下と一字ちがいですね。もつとも前の夫は聯隊長閣下のような軍人然とされたお顔ではなく、もつと優男でしたけど。」ゾーヤは部屋の隅を見つめた。つられて視線を巡らすと、戸棚の上に一つの写真があった。一つはドミトリイとゾーヤと娘たちが移った新しい写真。

もう一つはセピア色の写真。

そこには若いころのゾーヤと、帝政時代の軍服を着た僕が、それぞれまだ赤ん坊と幼子の娘たちを抱いて写っていた。

紅茶の水面に写った僕の顔を見た。収容所時代と赤軍の局地戦訓練でついた凍傷と雪焼けで歪み爛れた悪魔ののような顔があつた。茶器の取っ手をもつ指は一本足りない。

「プロホロフ聯隊政治委員は先の戦闘で戦死しました。」

意を決するしかなかつた。きわめて事務的に戦死通告と遺族補償に関する書類の入った封筒を渡し、その説明をした。

ゾーヤは目を伏せた。ショックで固まつてゐるようだ。

嗚咽がしばらく続いた。いたたまれなくなつて目をそらすと、台所の方からも若い泣き声が聞こえた。妄想した嗜虐的喜悦など微塵も感じなかつた。

「そうですか。軍人ですものね。」

涙をたたえながらゾーヤは顔を上げた。

彼女は涙を袖で拭いながら立ち上り、奥の方に向かつた。

「聯隊長閣下こちらに。」

促されるままに、別の部屋に通された。

「夫の書斎です。」

鍵束を一つ下の抽斗から取り出し、鍵のかかった抽斗をあけると、蟻で厳重に封された封筒が出てきた。

「夫が自分にもしものことがあつたら、聯隊長閣下に渡せと言つておりました。」

僕はゾーヤを名前で呼ぶこともできず、彼女の家を辞した。

魂が抜けたような足取りで、表に待たせていた将校専用車に乗り込んだ。

封を切つたが、運転手しかいないのに、中身を取り出すことができなかつた。

官舎の自室に帰り、机の上に中身の入つたままの封筒を置き茫然としていた。

背なの窓からの赤い西日の影法師がのびきり、駐屯地の明かりが薄く自室に差し込むまでそうしていた。

無性に煙草が吸いたかった。マッチと煙草入れを取り出し、もう吸い尽くしたことを思い出した。

### 『アレクセイへ

この手紙を君が呼んでいるということは、私はもうこの世にいないだろう。死因は何だろうか。もし政治絡みであつたなら、君の立場が危ないだろうから、読んだらすぐに燃やしてほしい。

君はおそらく私を恨んでいると思う。けど少しだけ私に謝罪と釈明の機会をくれないか。

私は幼いころから君に嫌な思いばかりさせていた。

けれど、分別が付くようになつて、罪悪感が大きくなつていつた。

勝手な物言いだとは理解している。けれど本當だ。

革命が起きてゾーヤから君が処刑されると聞き私はいてもたつていもいられなかつた。私は刑務所時代に党の幹部の一部や実務屋に便宜を図るなどいくつか恩を売つたことで彼らに顔が利くようになり、まさか本当に革命など起つていいなかつたので、稼ぎのよさそうな盜賊に入るような気持ちで入党してそこそこの人間を動かせるようになつていたのだが、そのつてを使って、賄賂と脅迫で止めた。

こんな方法だと誇り高い君は怒るだろう。怒つてくれ、私は無力で結局そのあとの君の収容所送りを止めるることはできなかつた。

だからせめて君の残したゾーヤと娘たちは守ろうと思つた。ゾーヤに黙つて公的には革命前に君と離婚していることにした。そして私の家族として守ることにしたんだ。ゾーヤにもなんとか言い含めて、(愛した人はただ一人だと彼女は何度も私の前で泣いたよ。) 表向き私の妻になつてもらつた。けれども誓つてゾーヤには穢れたことをしていいない。娘たちも立派に健康に育てることができたと思う。

党員として地位を固め、赤軍の政治委員の末端として日々を送つていると、配属先の同じ聯隊に君とそつくりの名前があつた。調べてみると表記の間違いで、凍傷でかなり顔は変わつていたけれど間違いなく君だつた。だがゾーヤには告げられなかつた。政治委員である以上将校と過度に接触するものは家族こと肅清のおそれがあつたからだ。けれど、それでもこのことは君にもゾーヤにも嘘をついてだましていることだつた。本当に済まない。せめて彼女と娘たちが健康でいることを官舎の近くで確認してもらうことが精一杯だつた。

私が死んだ今、今度は君がゾーヤを守るという本来の役目を担つてくれ。いや、私が不当に割り込んでしまつた本来の君のすべきことをしてくれ。特に私が政治絡みで死んだのであれば彼女たちの立場はとても危険になる。

灰皿にドミトリイの手紙を入れ火をつけた。暗い部屋でその灯火は一瞬部屋全体を明るく照らし消え失せた。

ドアがノックされた。誰何すると、僕の副官だった。  
自室に招きいた。

「同志少佐、至急聯隊本部へおいで下さい。」

ウオトカを腹いっぱい飲んだかのように上気し紅潮した彼は、汗をだらだらと垂らしていた。荒い息を整えることができていない彼に

「良き兵士は常に駆け足だな。」

ねぎらいにもならぬ頓珍漢な言葉を投げかけ、ただ事ではなさそと、そそくさと軍装を整え、聯隊本部へ向かった。半生を費やした憎悪があまりにも愚かであつた男はまたしても公人の立場に逃げ込んだ。

聯隊本部の作戦室では幕僚、各隊指揮官が集合していた。戦死したドミトリイの以外の各部隊の政治委員がいない。異様な光景だった。

皆すがるような目つきだ。

「何があった。」

報告を聞こうとすると、全幕僚の最も上席に見慣れぬ将校が立っていた。その後ろには聯隊規模の軍集団に配置すべき人數ちょうどの見慣れぬ顔の政治委員が整列していた。

なんのためらいもなく最上位に立つ将校は、金髪碧眼の、いかにもウラル以西より来たという雰囲気の洒脱な青年だ。階級はスターシュイ・カピターン（上級大尉）。伊達男は一步前に出て敬礼した。

「同志聯隊長。」

敬礼に答礼する。

「何か同志上級大尉。」

将校の胸にはいくつかモスクワの親衛隊に所属しないと獲得できない徽章が輝いていた。

「新たに着任しました同志軍團司令官からの命令書です。本時刻をもって同志少佐の指揮下に入ります。また同時に新たな政治委員が聯隊本部および麾下部隊に配属します。」

それだけ告げ、完璧な所作で書簡を僕に受け渡すと、彼は下がつた。第94特別軍團の上層部は更迭された。新たにベラルーシから司令官が赴任し、前の軍團司令部に一人ひとり自己批判させ、スペイにも匹敵する行為だと罵り、各自の左遷先を告げたらしい。

僕はといえば、命令に従つたのみであること、現状保持の意見具申を行い、そのため補給要請という明確な証拠がバールンウルトの集積地に書面として残つていたことにより、（僕の意見具申の事実は軍團司令部の報告書で握りつぶされていた。）ジユーコフ新司令官に評価された。直属の上官である師団長も留任した。

だが、第 57 特別軍団麾下の部隊で先任の軍団司令官の消極策に同調したものは将校、政治委員問わず、罷免されたらしい。政治委員は特に、極東における内務人民委員の失点により、赤軍に天秤が傾いたことから、それを取り戻すため、かなりの人数が家族ごと肅清されたようだ。ドミトリーへの肅清命令も両組織の権力闘争の一端だったのかもしれない。ゾーヤたちは含まれていない。彼女たちは華々しく戦死した革命英雄の遺族だ。結果として僕は彼女たちを守り得たことになるのだろうか。それは永遠にわからない。

新司令官は積極策をとるようだ。西方軍や親衛隊から一線級将校を引き抜き、駐モンゴルリヤの赤軍を鍛えなおし、マンジュウルリヤとそこに控えるイヤポンスキーをたたくようだ。失点なしとみなされた僕にも目付け役として子飼いを送り込んでくる念の入りようだ。

「党中央肝いりです。」

轟音とともに駆ける兵員輸送車両の列が一様に急停止し、兵員が即座に降車し戦闘態勢をとる。新司令官の命令通り、僕は聯隊に猛訓練を課した。

それを将校幕舎から監督していると、いつの間にか背後にいた上級大尉がぼそりと告げた。

本来軍規では欠礼を咎めるところだが、そんな馬鹿々々しいことはしなかつた。  
なによりたとえ、軍規を叫ぶしか能のない将校でもその名を聞けばそんなことはしないだろう。今回の顛末についての概要を聞かされ、

「同志軍団司令は同志少佐とその聯隊に期待しておられます。」

と、次はさらなる激戦区に投入するぞとほのめかされた。

「そうか。本職は任務に精励するのみだ。」

模範解答がこれしか浮かばなかつた。僕がモンゴルリヤの赤い夕陽に影だけ残す日も近そうだ。ドミトリーの頼みを果たすことは難しいかもしれない。

第 57 特別軍団に動員が発令されたのはその半月後だった。

(了)